

下咽頭頸部食道癌手術における吻合の工夫とT-Eシヤント, および甲状腺温存の意義(下咽頭頸部食道癌, 一般演題, 第61回日本消化器外科学会定期学術総会)

| | |
|------|---|
| 著者 | 大村 健二, 横井 健二, 木下 静一, 渡邊 剛 |
| 著者別名 | Omura, Kenji Yokoi, Kenji Kinoshita, Seiichi Watanabe, Go |
| 雑誌名 | 日本消化器外科学会雑誌 |
| 巻 | 39 |
| 号 | 7 |
| ページ | 1205-1205 |
| 発行年 | 2006-07-01 |
| URL | http://hdl.handle.net/2297/3964 |

1322

下咽頭頸部食道癌手術における吻合の工夫と T-E シヤント, および甲状腺温存の意義

大村健二, 横井健二, 木下静一, 渡邊 剛

(金沢大学心肺・総合外科学)

2005 年 12 月までに当科で外科的治療を行った下咽頭頸部食道癌は 64 例である。縫合不全を 6 例 (9%) に認めたが, うち 5 例は minor leakage であった。グラフトの壊死は認めなかった。下咽頭空腸吻合は空腸を形成したうえで端々に施行しており, 端側吻合と比較して良好な食物の通過を認めた。しかし, 食道発声が可能になるまでには至らなかった。最近の 3 例では手術中に一期的に T-E シヤントを作成し, 日常会話が可能な発声能を得た症例も経験した。甲状腺については 5 例 (8%) で両葉を, 35 例 (57%) で片葉を温存した。また, 片葉を温存した症例のうち 10 例 (16%) では上甲状腺動脈を血管柄とした。甲状腺の片葉を温存してもおよそ 1/6 の 6 例で甲状腺ホルモンの補充を必要としたが, 必要量は甲状腺全摘症例と比較して有意に少なかった ($p < 0.05$)。また, 上甲状腺動脈を血管柄として片葉を温存した 10 例中 9 例で術後 PTH が分泌されていることが確認され, うち 8 例で活性型ビタミン D3 製剤からの離脱が可能であった。下咽頭空腸端々吻合, T-E シヤント, 甲状腺片葉もしくは両葉の温存は, 下咽頭頸部食道癌手術の際に有用であると思われた。
